

横浜

Yokohama Renaissance

ルネサンス



Number 25

特集 作家・山崎洋子さんと訪ねた

「昭和な商い」

Who's Who in YOKOHAMA

川松正孝さん

横浜信用金庫



Photo by Yabe Shihoko

いまに残る「昭和な商い」を、作家・山崎洋子さんと訪ねた。
「平成」に遷つて四半世紀が過ぎた。
「昭和」という響きに懐かしさを感じるとともに、
時代を超えて受け継がれてきた手仕事、風景、
たたずまいがだんだんと姿を消していく様子には寂しさを覚える。

「降る雪や明治は遠くなりにけり」
明治生まれの俳人・中村草田男が、
1931(昭和6)年に東京・港区の母校、
青南小学校を訪れた際に詠んだ一句である。
金ボタンの外套を着た子どもたちの姿に、
着物に下駄ばきだった自分の姿を重ね合わせ、
歳月の隔たりを感じたという。

特集 作家・山崎洋子さんと訪ねた 昭和な商い

A Table of Contents

目次／理事長ごあいさつ	2
特集 作家・山崎洋子さんと訪ねた「昭和な商い」	
物井宏介 みなと旅館 みなと湯	4
泰西の風情を残す、 癒しの銭湯	
本田 博 三吉演芸場	6
横浜の文化— 大衆演劇の灯を受け継ぐ	
平工希一 株式会社篠地活字	8
歴史、手間、品質— 活版活字の重みに思いを込め	
内田福太郎 内田いも店	10
大学芋一筋 60余年、 愛される素朴な味	
余川美智子 余川履物店	12
人情に支えられて 下駄屋を守る	
村上 墨 ハドソン靴店	14
靴底にこだわり、 技術を磨く	
内野健一・よし子 しみぬき杉本家	16
経験を積んで、 秘伝を知る「手」	
横浜を詠む 水原紫苑 写真：矢部志保	18
Who's Who in YOKOHAMA	
川松正孝 酒学工房 川松屋	20
酒博士が語る、 「酒は科学、酒は文化」	
横浜の聴き方 第17回 中島久 「横浜銀蠅のインテリジェンス」	22
横浜ジェリーピーンズ倶楽部通信	23

ごあいさつ

横浜信用金庫理事長
大前 茂

『横浜ルネサンス』第25号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行しています。

本号では、特集「昭和な商い」と題し、作家・山崎洋子さんにお願いして、伝統や対話を大切に地域で商売を展開される方々を取り材しました。

Who's Who in YOKOHAMAでは、弘明寺商店街の酒学工房川松屋の川松正孝さんをご紹介します。

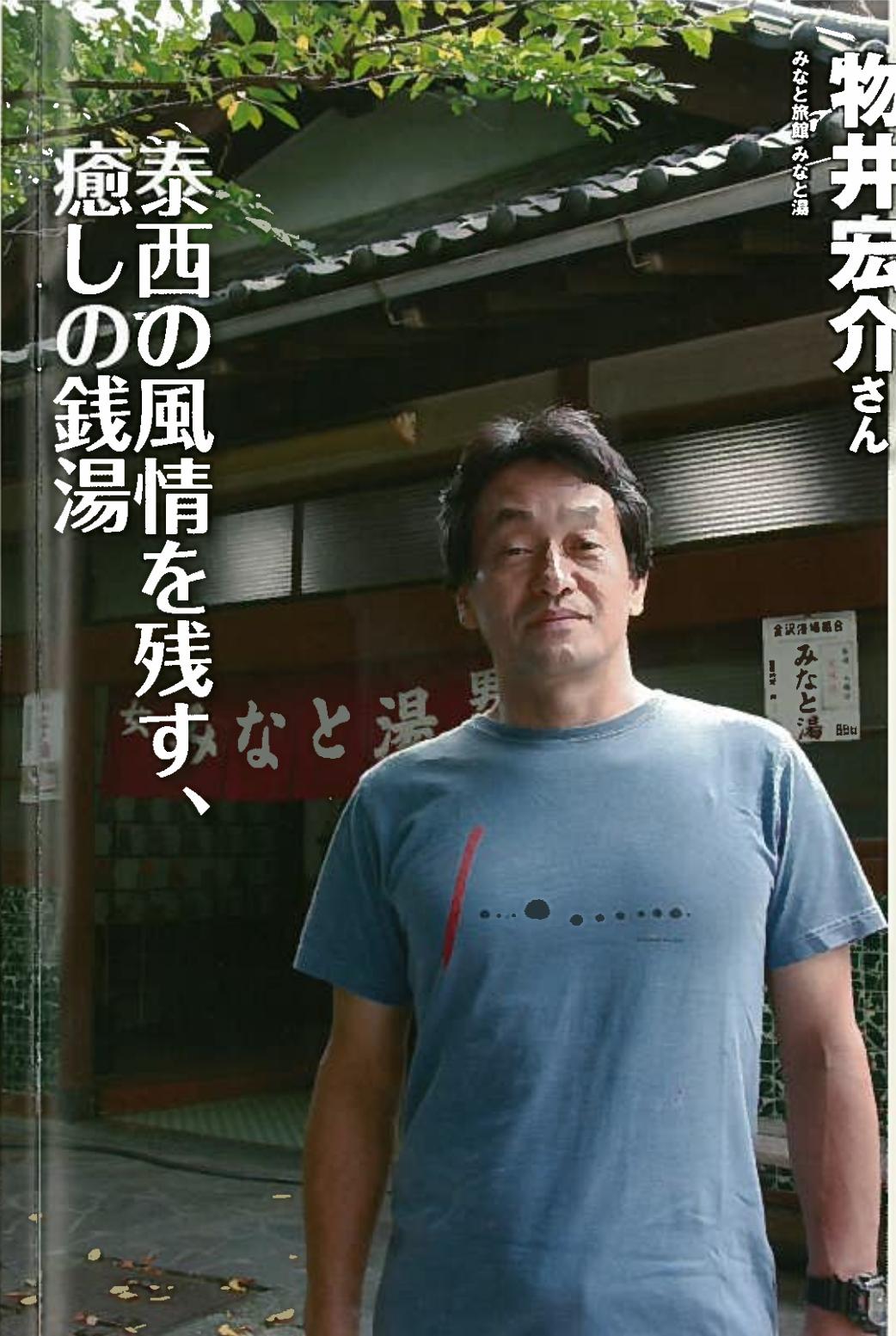
第17回「横浜の聴き方」では、『横浜銀蠅のインテリジェンス』を取り上げています。

『横浜ルネサンス』第25号、お楽しみいただければ幸いです。

表紙写真：矢部志保

物井宏介さん

みなと旅館 みなと湯



泰西の風情を残す、 癒しの銭湯

京浜急行追浜駅から横須賀街道を金沢八景方面に歩いていくと、左手に突然、緑豊かな石垣の露地が出現する。その奥に、一本松を従えた人母屋破風の趣深い玄関があった。「みなと旅館 みなと湯」と看板にある。

昔ながらの銭湯を尋ねて、みなと湯へ辿り着いたのだが、こうなるとやはり、1956（昭和31）年創業という旅館の方も見たくなる。経営者の物井宏介さん（56）にお願いし、中を案内していただいた。2階建てで和室14室、洋室1室、大広間と食堂。風呂は隣のみなと湯だ。黒光りした階段の手摺り、広い踊り場、格子の格天井。古色を帯びてはいるが、じつに贅沢な造りである。建てたのは宮大工と伺い、さもありなんと納得した。創業者は宏介さんの祖父である。

「昔はここで、結婚式やダンスパーティーなんかもよくあつたんですよ」

旅館内には、挙式のための神殿もあったそうだ。

埋め立て景気の栄枯盛衰

この旅館ができた当時を描いた大きな絵地図が、食堂の壁に掲げてあった。鷹取山と富士山を背景に、なんと4軒ものHOTEL MINATOがある。戦後、

横須賀で米問屋を営んでいた祖父は昭和30年代、旅館業に転身。人手した土地にホテルやレストランを建てた。金沢の海で大規模な埋立が始まることを見越してのことだろう。

埋め立て工事は昭和40年代から50年代にわたり、横浜市六大事業のひとつとして行われた。次いで八景島という人工の島が造られた。工事のために全国から集まつた土木の専門技師や職人の宿泊施設として、ホテルはフル回転した。また米軍施設や花街もあり、いまの静けさからは想像もできないほど、この地域は賑わっていたのである。

こうした事業が終わると同時にホテルも役目を終え、次々と閉館した。ひどつだけ残ったのが、現在のみなと旅館である。いまは造船関係の専門職人、海洋研究所の関係者などが長期滞在するほか、周辺にある大学、スポーツ施設、工場関連の団体客が多い。夏はもちろん、海のレジャーを楽しむ家族連れも訪れる。

鷹が舞い天使かたわむれる銭湯絵

さて、みなと湯である。ホテル開業から3年後に開業。脱衣場は昔ながらの格天井で、独特の照明器具も、旅館にあるのと同じだ。一見、素朴に見える建物だが、じ

つは総檜造り。

浴室は洋風にリニューアルされており、シンプルで明るい。銭湯につきものの絵は、富士山ならぬ泰西名画風のタイル絵。男湯には鷹が舞い、女湯には天使がたわむれている。いまどきの、あれもある、「これもある」というスーパー銭湯ではない。マッサージ専用室が併設されているが、あとはバスタブとシャワーフィックスのみ。王道のお風呂屋さんである。

毎月15日前後に敬老デーが設けられており、65歳以上は通常470円の人浴料が150円になる。水曜日は「じやばら湯」、「じやばら」は相模山県北山村だけで生産されている柑橘類だ。「邪氣を払う」という意味があり、疲労回復に効果があるといふ。湯上がりに牛乳はないが、「じやばらまる」という缶ジュースがある。こちらは花粉症に効くらしい。

とつとつとした語り口の宏介さんだが、じつは4人の子持ちで趣味はスノーボードとサーフィン。旅館も銭湯も、しっかりとレトロ感を残しつつ、若い客への対応もおこたりない。全室DVDプレーヤー付

無線LANも完備している。昭和の雰囲気を漂わせながら、平成の機能を備えたここで、私もしばし、金沢の昔を偲びたくなつた。

TEL:045(701)8349 FAX:045(785)3705
<http://www.minatoyu.com/> [湯営業日:木曜日を除く毎日] [営業時間:14時~22時]
 [入浴料]大人470円 小学生200円 乳幼児100円 [回数券あり 毎月15日前後に敬老デー実施 65歳以上入浴料150円]

本田 博さん

三吉演芸場

特集 昭和な商い

〒233-1-0032 横浜市南区万世町2-17 TEL: 045(233)7-6332
 を除く毎日 昼13時(2時間)夜18時(2時間)の昼夜2回 一般席: 2200円 指定席: 2500円 7歳以上の方 ハマトモカードをお持ちの方は100円引き 【原田ヒロシ演歌ライブ】毎月第4週の月曜日 午後6時開演 前売り: 2000円 当日: 2300円

<http://miyoshiengeijo.web.fc2.com/> 【劇団公演】月曜日午前

玉江さんが「人情」で守り抜いたものに、現代を冷静に見つめる、博さんの口が加わった。私も横浜市民として、南区の住人として、嬉しい限りである。



横浜の文化・大衆演劇の灯を 受け継ぐ

30年余りも前のこと。若い女性を

吉演芸場に案内したら「こんな世界があつたなんて」と、たいそう驚かれた。

私は子供の頃、故郷の町の公民館などで大衆演劇を観たことがある。当時は旅芝居と呼ばれていた。演目は股旅物などの人情時代劇。いまも基本はそれだ。そして華やかな衣装の歌謡ショー。都会育ちの若い彼女には、時代がかかる芝居と極彩色のショーという組み合わせが、なんとも不思議で新鮮だったようだ。

それから数年後、当時の館主であった本田玉江さんと親しくなり、大衆演劇のこと、この界限のことも含めて、さまざま話を聞かせていただくようになった。

三吉演芸場が開業したのは1930（昭和5）年。初代館主は玉江さんの義父の末吉さん、そして二代目が夫の貢さんである。階が鉄湯一階が劇場という、下町情緒に満ちた建物だつた。戦争で二時期、劇場を閉鎖したが、1950（昭和25）年に再開。三吉橋商店街に隣接した横浜橋商店街がその頃から賑わい始めたこともあり、演芸場は非常な人気を博した。

が、高度成長期に入ると娯楽の幅も広がり、大衆演劇の人気は下降の一途をたどる。全国にあつた常打ち小屋（大衆演劇専門館）も次々と姿を消し、横浜

では三吉演芸場だけが残つた。

商社マンから館主へ―四代目の決断

もう劇場は閉めようという貢さんに代わって、玉江さんが館主の職に乗り出したのが1973（昭和48）年。子供の頃から好きでたまらなかつた演劇の灯を、ここで消してなるものかと頑張り抜いた。たとえば、かたわらを流れる中村川から、着飾つた役者が上がつてくるという豪奢な「船乗り込み」。さらには、ご近所の真金町出身で、落語界の重鎮である桂歌丸師匠の定例「門会」。誰もが「無理でしょ」という企画を次々と実現させた。こうした功績により、玉江さんは1989（平成元）年、横浜文化賞を受賞している。

やがて松井誠、梅沢富美男などのスターが出てきたことで、大衆演劇は少しずつ人気を盛り返してきた。ところが今度は、老朽化による建て替えという問題が持ち上がる。横浜市住宅供給公社との共同事業になるので、しっかりと後継者を決めることが条件となつた。こうして四代目館主となつたのが、玉江さんの長男、博さんである。

博さんはずっと商社勤務だった世界

を相手に飛び回る商社マンから、下町の大衆演芸場の館主へ、180度の大転換

である。博さんにとっては苦渋の決断だつた。だが三吉演芸場はもはや南区のシンボル。いや、横浜の大重要な文化だ。ここで無くすわけにはいかない。

商社を辞めた博さんは、まず調理学校へ入学した。大衆演劇には茶屋が付きもあるだろうと、カフェを併設するため調理師の資格を取得したのだ。10歳代から70歳代まで、学校にはさまざまな人がいた。商社勤務では知り得なかつた世界と、まことに出合つたという。

日本一高い入場料にはわけがある

「うちは入場料が日本高いんです」と博さん。なぜなら、客からの心付けや

プレゼントに頼らなくともやつていただけるギヤラを、劇團に払いたいから。

「公演時間も短くて、マックス3時間」

人の集中力はそれくらいが限度。それに若い客を取り込むには、テンポの良い舞台構成が求められるから。

「さらに、公演期間も短いんですよ」

12月には半月間劇場を閉め、舞台、客席、すべてのメンテナンスを行ふ。

玉江さんが「人情」で守り抜いたものに、現代を冷静に見つめる、博さんの口が加わつた。私も横浜市民として、南区の住人として、嬉しい限りである。

平工希一さん

株式会社 築地活字

特集 昭和な商い

〒232-0014 横浜市南区吉野町5-12(三進興業ビル1F)
TEL: 045(261)1589 FAX: 045(261)5890 <http://isukiji-katsushii.com/>
【営業時間】8時30分～17時 / 休業日：土・日・祝日

歴史、手間、質量―活版活字の重みに思いを込め



物書きのはしきれだというのに、印刷の知識は皆無だった。友人たちが時に「築地活字」という言葉を口にし、「見にいきたいなあ」と憧れの眼差しで呴くのを、意味不明のまま聞き流していた。そんな状況のまま、築地活字へ伺つたのだから。

無知な私は、印刷機械がバタンバタンと動いてる光景を想像していた。もちろん違う。そこは不思議な機械とおびただしい文字の迷宮だった。壁も棚も机の上も、床に置かれた箱の中にも、小さな金属の文字がぎっしり。それが一齊に躍り出て、われ先に物語を開拓するのではないかと、一瞬、奇妙な幻想に襲われた。まさしくカルチャーやショックである。

「男はつらいよ」つて映画、観ました?

茫然と突つ立つていたら、社長の平工希一さん(56)から訊かれた。私は寅さんの大ファンだから、もちろん全作品観っている。そうか、寅さんの義弟は、「とらや」の裏にある印刷会社で働いていたのだ。

「活字が並んでるシーンではうちのもの使われてるんですけど、ただね、ピンセットでつまみ出してたのは、違うな、と思いまして。傷むから必ず指で出します」

築地活字を支える26万個の活字字母型

必要な文字をひとつずつ拾い出し、本

柱に組み込み、インクをつけて押す活版印刷。活字印刷を初めて行つたのは中国だが、15世紀になつてドイツのグーテンベルクが活版印刷技術を画期的に開発した。日本でも幕末期の長崎で、オランダの機械による西洋式活版印刷が行われている。以後、技術改良を重ねて普及し、昭和の中頃までは新聞も活版印刷だった。

数行ならともかく、新聞や本をこれで印刷するとなると、どれほどの手間がかかるのか。想像しただけで気が遠くなる。ことに日本語は漢字、ひらがな、カタカナと種類が多い。そこへ外国文字、数字、飾り罫なども入つてくる。字体もさまざままだ基になる「母型」という活字だけでも26万個近くあるという。

この母型から必要な活字を選び出し、

この母型から必要な活字を選び出し、

鉛造機で大きさを変えた活字を作り出し、

いく。どこがどうつながっているのかわからぬ、複雑怪奇な機械だが、鉛、アルミニウム、錫から成る合金を溶かすので、中のが350度から400度まで上げる6台並んだ鉛造機を操るのは、この道50余年という大松初行さん(71)。活版印刷の全盛期には、この機械が18台あったそうだ。

築地活字は1919(大正8)年、横浜博文館として中区南太田町で創業。震災

や空襲で大被害を受けながらも、活字铸造と活版印刷を守り抜いた。現在の社名になつた由来は、活字界では別格の存在だった東京築地活版製造所から活字字母型の部と人員を譲り受けたからだとされている。

いま再び注目される活版印刷

印刷の主流はコストパフォーマンスの高いオフセット印刷に移つた。活版印刷の運命やいかにこと危ぶまれたが、ここへきて、じわじわとまた人気が上がり始めている。『人の思いとか、手触り、あたたかみ、そしてオリジナリティで』。それが活版印刷にはあるのです。

と、平工さん。築地活字では、毎月下旬個人で体験できる活版印刷もある。築地活字から販売されている活字ホルダー「MODERNE-2」は、自分で活字を並べ替え、紙や革などに印字できる。T字型で持ち重りのする金属ホルダーは、持つているとかなり自慢できそうだ。

いきなり自分で活字を並べ替えてみようかな。やはりプロに発注して、ちょっとマニアックな気分になつてみよう。私もこの機会に、

内田ひも店

特集 昭和な商い

内田福太郎さん

〒220-0035 横浜市西区霞ヶ丘76 TEL. 045(531)5369

営業時間 9時～18時

日曜営業 (定休日) 月木曜日

ティファーワークのみ

交通手段 京急行黄金町駅下車徒歩15分

横浜市営バス霞ヶ丘バスターミナル下車徒歩5分

横浜市営バス一本松小学校バス停下車徒歩1分

大学芋一筋60余年、愛される素朴な味



昭和の時代には、心の故郷と呼びたくなるような「小商い」がいろいろありました。ポンせんべいとか煙草屋とか包子研ぎとか。けれどいまどき、デベ地下の二角ならともかく、横浜の住宅街で、大学芋だけを商う店が、はたして成り立つか。

ちょっと首をかしげつつ、京急黄金町駅から、「ここはわかりにくんだよ」という運転手さんのタクシーに乗り込んだ。坂の上の、ほんとうに静かな住宅街。こじんまりした普通の家の二階。その一角に、内田いも店はあった。窓の下に「大学いも」と記された控えめな看板がある。手書きのチラシも窓に貼られている。その窓の内には、ガラスケースがひとつ一枚の皿に大学芋が盛られている。そばに、小柄なおじいさんが一人、内田福太郎さん（90）である。

「お客さん、来るのかなあ……と思うまもなく、すうっと車が停まつた。品の良い中年女性が降り立ち、『300グラムいただける?』統いてまた車。しばしおいて、また車来るんだよ。だつてうまいんだもん、俺んとの芋は」

自慢するでもない口調でそう言い、一畳ほどの狭い調理場兼売り場を、内田さんはゆつたりと行き来する。大きな飯炊き

釜の中では、ぐつぐつと煮立っているのは揚げ油だ。そこへ網杓子を突っ込んで芋をすくい、秘伝の蜜にくぐらせ、ババッと黒ごまあ振る。

「はい、食べてご覧ん

熱々を爪楊枝で刺し、ひよいと差し出してくれた。表面はカリカリ、中はとろり、ふんわり。品の良い甘さが口の中に満ちる。これは確かに、わざわざ車で来るよねえ、と即座に納得した。

東京小平の農家から横浜へ

内田さんは東京の小平で生まれ育った。家は農家で、もちろんサツマイモも栽培していた。戦争が始まると兵隊になつたが、幸いなことに戦地へ送られることはなかつた。終戦後は少し会社勤めをした後、横浜で大学芋を商つていた叔父の元へ出てきた。叔父には子供がいなかつたので、内田さんは跡継ぎにしたかつたらしい。仕事のコツはなにも教えてくれなかつたが、内田さんはひそかに、俺ならもつとうまく作れる、と思っていた。

1953（昭和28）年、仕事を辞めた叔父から、道具一切を買い取り、独立。同時に結婚して、この場所に店を出した。

その頃は、ここ、商店街だつたんだよ。大好きの声が溢れている。こうなつたら100歳まで頑張つていただこう。▼

たもんね

40年間、100グラム100円で売つてきた。子供が買える値段だ。物価高騰でやむなく120円に値上げしたが、ずっと量り売り。客の目の前で作り、目前で量つて渡す。昔は芋の卸しや焼き芋もやつたが、8年ほど前から大学芋だけ。しかも夏場の3ヶ月は店を閉める。

うちの芋は、茨城の農家から買つて紅あずま。農薬もほとんど使つてないよ。だけど夏場は芋がないから休むんだ。客は秋になるのを待ちかねてやつてくる。土日は一日40キロの芋が無くなる。女房が体調を崩してから、近くに住んでる娘が手伝つてくれるんだけど、俺もこのごろ腰が悪いから、まあ、これで精一杯かな。

いろいろ苦労もあつたが、いまは孫が6人、ひ孫が一人。悠々自適である。「宣伝?なんにも。だけど、お客様が勝手してくれてるみたいだね。確かに、インターネットには内田いも店の大好きの声が溢れている。こうなつたら

〒233-0024 横浜市南区浦舟町1-19 TEL: 045(231)2072
 【営業時間】10時30分～18時（定休日：月曜日）
 【交通手段】横浜市営地下鉄東横線より徒歩5分、横浜市営バスA6・98・110系統で三吉橋バス停下車徒歩2分

余川美智子さん

余川履物店

人情に支えられて 下駄屋を守る



「下駄の事がわかる人なんて、ほんとに少なくなつちゃつたわねえ」

亡きご主人の作だという証目の通った桐下駄を撫で、余川美智子さん（79）は呟く。鼻緒は「本天」ビロードのような艶を放つ、肌触りの良い布である。

「この下駄ね、台と歯の継目がないでしょ？ くりぬきといって、一本の木から彫り出しているの。だから、歯が折れたり外れたりしない。あ、こっちの下駄はね、台が神代杉。千年以上も水の中に埋もれていた古代の木なのよ」

余川履物店は三吉橋商店街にある、ものはや稀少な存在となつた下駄、雪駄の専門店。大事に仕舞つてある思い出の下駄とともに、鼻緒の穴を開ける「くじり棒」、下駄の面を削つて磨く「うづくり」、いぼた岬」といつた道具も見せていただいた。戦争で空襲が激しくなつた頃はね、こういう大事な道具が焼けてしまわないように土に埋めといたんだつて」

美智子さんは南区前里町で生まれた。父は会社員だったが空襲で亡くとも失い、一家は三吉橋へ移り住んで和菓子屋を開いた。この一帯は奇跡的に戦火を逃れ、家屋もちゃんと残つていた。美智子さんが小学校5年生の時だつた。数年後、はす向かいにあつた余川履物

店が、隣に店舗兼住宅を新築して移つてきた。美智子さんは余川家の人々にもたいそう可愛がられて育つた。とりわけ、彼女を熱く見守つていたのが余川家の次男で美智子さんより3歳年上の清司さんだ。美男で真面目。長じて、美智子さんも彼の思いに応えた。幼馴染みから恋人に、そして清司さんが店の跡継ぎになると夫婦に。二人は寄り添い続けていく。

下町の“美智子さん”

結婚は美智子さんが22歳の時だつた。皇太子のご成婚と同時期である。あちらの美智子さんは一般人から皇太子妃へと大転換を遂げたが、こちらの美智子さんは和菓子屋から隣の下駄屋へ。生活の場も開いた人たちの顔ぶれもまったく変わらなかつた。それでも履物の奥深さを学んだのは、嫁いでからのことである。

立派な桐の木を丸ごと一本買つたら、中がスカスカ。木を外見から見分けるのは、プロでも難しいことを知つた。下駄で土の道を歩くと、微少な石が歯にめり込んで丈夫になること、高級な雪駄の表は竹の新芽で編まれることなどを、店番をしながら、夫や職人たちの仕事を見ていいうちに覚えていった。鼻緒を縛る麻紐を、職人がきちんと通して縛れるようになる

には10年かかるという。「昭和40年頃まで、女性も普段着の洋服に下駄をつっかけて、という感じだつたわね。でも男性の場合、洋装に下駄はもつて意味があつたみたい。大学生は学生服に下駄。ヤクザの親分が正装するときも、上等な背広に足元は上等な下駄」

いい音を鳴らして颯爽と歩くのが、男のステータスだつたのだ。

小さな商店街に大きな人情

着物人口が少なくなるに連れ、下駄の需要も減つていつた。職人も育たない。そして2007（平成19）年、清司さんが癌で亡くなつた。でも、店を閉めるわけにはいかない。三吉演芸場に出演する役者さんや、ご品販の役者に下駄や草履を贈りたいファンたちが、オリジナルな足をここに求めて来る。清司さんが亡くなつた後は友人の職人さんが、その仕事を請け負つてくれている。

訪れるのはお客さんだけではない。美智子さんの友人、三吉演芸場帰りのお馴染みさんが、菓子やお握り持參で店に寄つていく。「ここで育つて、ここで結婚して、私の世界はここだけ。狭い人生でしょ？」

その分、小さな商店街の大きな人情に文えられ、孤独とは無縁な人生である。▼

村上 墓さん

ハドソン靴店

〒221-10841 横浜市神奈川区松本町3-26-3 TEL/FAX: 045(6328)9496 http://www.hudsonkutsuten.com/

[営業時間] 12時～20時(月曜のみ18時閉店) [定休日] 水曜日 第2・4水曜日

[交通手段] 東急東横線反町駅より徒歩5分

靴底にこだわり、技術を磨く



急線反町駅前の商店街を抜け、何本かに枝分かれしたさらなる商店街を行くと、靴のかたちをした絶版看板が見つかる。ガラス張りの店内には、古いミシンのようなものをはじめとして、何をするのか見当もつかない機械がぎっしり。壁の棚に整然と並んでいるのは、年月を経てきたらしくたくさんの中だ。

その中心で、机に向かって作業をしているのは、すらりとした美形の男性。イタリアあたりの古い町で、こんな光景を見かけたことがあるような気がする。

ハドソン靴店。青年は二代目の村上墓さん(33)である。三代目といつても親の跡を継いだわけではない。初代の佐藤正利さんは横浜マイスターという、優れた技能職者の称号授与者である。紳士靴製造で本型とアッパーレザーや使つてさまざまな製法で靴に仕上げる、底付師のプロだ。吉田茂元首相や石原裕次郎のオーダー靴を製造したこともある。靴修理職人を志して以来、村上さんは3人の師匠のもとで修業をしたが、その一人が佐藤さんだった。子供の頃から手先が器用だった村上さんは、『職人』に憧れていた。けれども具体的になにをやりたいかわからぬまま、大学の工学部に進んだ。が、ある日、テレビで靴職人を観て大感動打たれた。

「光」が見えたのは3年目

大学を辞めて、3人の職人に教わつて修行を積み、その後革製品のメツカである浅草で勤めた。そして、師匠の一人であった佐藤さんが亡くなつたことで、4年ほど前、店を継いで独立したのである。

靴の世界はかなりの分業だという。丸ごと足、自分でこしらえている人もいるが、非常に高い靴になつてしまふ。一方、既製靴は手頃な値段で世界的ブランドの靴も買うことができる。もちろん村上さんも底付師が本職だが、自分の「こだわり部分」を選択した。それが、靴底である。店にあるたくさんの機械や工具は、より丈夫で、より歩き心地の良い靴底のためにある。日本の技術は世界でも折りり、だといふから頼もしい

「とはいひ、当初はお客様がほんとうに少なくて、正直、地獄でした。知人と共同経営で始めたのですが、相方はすぐ辞めてしまひましたし」

穏やかな微笑を浮かべ、村上さんは言う。地獄を味わつた人にはとても見えない。が、たしかに靴の世界は、安価な量販店も多いし、デザインもサイズも豊富だ。修理するより新しい靴を買おう、と思う人の方が多いだろう。

「光」が見えてきたのは、3年を過ぎてから

でしょうか。いまでは北海道あたりからも、

修理依頼の靴が送られてきます。

では、どんな靴が村上さんの元に持ち込まれるのだろう。修理を待つ靴を見回して

みれば、高級ブランドかな、と思える個性的なハイヒールやブーツが並んでいる。だが

そこに混じつて、どう見ても普段履きにしか見えない靴もある。

「高価な靴だから」ということで持つて来られる方は、20～30人に1人くらい。たいへいの方は、その靴への愛着が理由で修理を希望なさいますね」

気になるのは値段だが、定価はない。靴の種類や状態によるので、遠慮なく尋ねてみたほうがいい。

「ちゃんとした革靴は、手入れや修理をして使えば一生ものです。自信を持つてそ

う言えますね」

安価な量販店の激増で、服でも靴でも、気に入つたものを大事に使うということをあまりしなくなつた。でもその安易な使い捨て生活で、自分の人間性まで安っぽくなつていいだろか。この店は、そんな

内野健一ほかの手しみぬき杉本家

Tel 045(623)8478 横浜市横浜市中区大和町2-1-45
〔営業時間〕9時30分～20時 〔定休日〕日曜日
〔交通手段〕JR根岸線山手駅より徒歩3分

経験を積んで、秘伝を知る「手」



トナーは妻のよし子さんだ。座卓を挟んで静かに向かい合う夫婦の姿は、ここを通る人々にはお馴染みの光景だろう。

染みの正体を見定める

「ワイシャツに染みがついたから、と持てこられる方もあるのですが、ご家庭で洗えばとれるようなものは、やり方をお教えるのはもつたいないですから」と、よし子さん。

洋服の染み抜きもするが、中心は絹物の着物である。高価な着物になればなるほど、プロでないと難しい。あわててハンカチに水をつけて拭いたりすると、逆に染みが広がってしまう。へたに薬品を使ったりすると色落ちして、取り返しがつかないことにもなる。

日本の捺染技術は世界一だから、着物の色留めもしっかりしているが、外国製のドレスは、高価なものでも色落ちしやすい。道具を見せてください」と言うと、内野さんは戸惑った表情で、ちびた石鹼と小さなブラシを出してくれた。

「普通の石鹼とブランシです。難しいのは、染みの正体を見分けること。どういう性質の染みなのかを見定め、生地を傷めないよう、色落ちしないよう、複数の段階を重ねて抜いていくのです」

ちゃんと抜いてもらうためには自分でいじらないこと。時間が経つと落ちにくくなるので、早く持つてくこと。汗染みも、早ければ簡単に落ちるが、古くなつて黄ばんだものは難しいそうだ。

「父が修業した店が杉本家。うくん、流派というのですかねえ、全国にあるんですよ、染み抜きの杉本家って」

使う道具は少ない。薬品もあまり使わない。長年の経験を積んだ「手」だけが、秘伝を知っている。そんな手作業だから、仕事は、こなせる範囲でしか受けない。

「仕事をなくて困ったこともないけど、受けられるだけしか受けない。だから、忙しそうで、長いこと日の前で内野さんの仕事を見て、手伝ってきた奥さんなら、たまには代わりにやれますよね」と尋ねたら、よし子さんに「とんでもない」と大きくかぶりを振られた。

「何年そばにいようと、私は素人です。怖くて、絶対に手は出せません」

プロへの畏敬がにじむ言葉だった。

JR根岸線山手駅の脇から、本牧通りに向かってまっすぐに伸びる大和町商店街。まっすぐなのにわけがある。横浜に外国人居留地があつた時代、ここは、駐留していたイギリス軍とフランス軍の射撃練習場だった。その直線を活かして、競馬や陸上競技も行われていた。射撃場がなくなつてからも「鉄砲場」という呼称は長く残つていたようだ。

日本でワイシャツを初めて作った「大和屋」がこの土地の払い下げを受け、開発を行つたので、ここは大和町という町名になった。根岸線山手駅が開業したのは1964（昭和39）年である。

商店街の山手寄りに、「三丁目の夕日」という映画から抜け出したような、じんまりした日本家屋がある。下部の板にひび割れの入つたガラス引き戸が、いかにも昭和な佇まい。

「はい、この家は1951（昭和26）年に建ちました。そこで働いていた父が独立して、店を開業したのです。その頃のままですね。この家は、私は18歳から4年間、京都の老舗で修業しました。22歳で帰ってきて、ここでずっと手伝つて、父からバトンタッチされたのは、私が40歳の頃です。

二代目となる内野健一さん（64）。「

Text by Yamazaki Yoko. Photo by Yabe Shiro.

アイスクリン 固く冷たし そのがみの 高利貸をば アイスといへり

水原紫苑

写真 矢部志保

アイスクリーム発祥の地は横浜だそうで、今でも昔風のアイスクリンというものが作られている。卵と牛乳だけで作ったような感じである。今の柔らかいアイスクリームの美味しさに馴れた舌には新鮮だ。

昔、高利貸をアイスと言つたことは、尾崎紅葉の『金色夜叉』に出て来る。美人アイスという、女の高利貸が登場する。

みずはらしおん 歌人。1915年神奈川県生まれ。早稲田大学文学系卒業後、春日井建に師事し、以降歌集『ひあんか』、客人(まうらうど)『くわんおん(観音)』『いろせ(あかるに)』、著作『世阿弥の墓』『星の肉体』『京都うた物語』などを発表。現代歌人協会賞受賞。戯曲『花文子賞』『河野愛子賞』など多数受賞。
河野文子賞 河野愛子賞など多数受賞。
やべしほ 写真家。1974年奈良県生まれ。同志社女子大学短期大学部日本語日本文化学科卒業。96年トライベーナル日本語教師となる。帰国後、平地町にて師事し、独立。渡辺真夫のミーティング・シンポジウムを多く撮影している。



酒博士が語る、「酒は科学、酒は文化」



研究者からの酒屋への転身

世の中に「博士」を自称する人は多いが、川松屋の三代目、川松正孝さん（68）は本物である。酒屋の息子に生まれ、発酵・醸造を学ぶために東京農業大学の大学院を卒業。さらに国税庁醸造試験所に数年間、研究者として勤務した。

そのまま研究を続けたかったが、家業の跡継ぎという重責を担う身、悩みはしたが、いかにおいしく飲んでいたくかで、世の中に貢献しようと、29歳で潔く転身した。

川松屋のある弘明寺商店街は、横浜の古刹、弘明寺の参道として昔から栄えてきた。川松さん一家がここへ越してきたのは1950（昭和25）年。もとは中区若葉町で酒店を営んでいたが、空襲に遭い、若葉町は戦後、米軍の接收地となつた。そこで、空襲を逃れた弘明寺に移転してきたのだ。幼かつた川松さんにとって、最初の記憶は小店がひしめく闇市。

「界限には小さな旅館が何軒かあつて、芝居小屋や花街なんかもあつたねえ」
1956（昭和31）年、東洋一と讀えられたアーケードが商店街に設置され、いた店舗も徐々に整備され、いまのようなく町風情を残しながらも落ち着いた商店街になつたのである。

オールマイティな日本酒は世界一

酒屋さんに對して、無茶な質問をぶつけてみた。酒にも色々種類がありますが、

「これが一番素晴らしいと思いませんか、と。」「日本酒だね」

即座に答えが返ってきた。決して、身び

いきではないと言ふ。

「日本酒はオールマイティー。何にでも合

うんだから。飲み方や料理との合わせ方

次第で、お酒は、おいしくもまずくもな

いきではない」と言う。

川松さんのうんちは何度も耳聴して

いるのだが、そのたびに新鮮だ。アルコー

ルに強くはないが、食事をおいしくいただ

くためにお酒は毎日：『という私は、思わ

ず腰を下ろし、じっくり伺わせていただき。こういう客のために、店にはテーブルと椅子が置かれている。

「日本酒は冷やからお燶まで、いろんな飲み方ができるでしょ？ そんな酒はどこの国にもない。でもそれだけに纖細。一番おいしい状態で飲まなきやもつたいない。冷やはね、冷蔵庫で冷やしたら、飲む30分前に取り出しておく。それが最適な温度なんだから。洋食に合わない？ そんなことないよ。いま、日本酒は歐米でも大ブームだもの。」

パンにチーズをのつけて、醤油もろみか味噌をちょっととつけて、それを肴に日本酒を飲んでみて。チーズに麻辛もいいね。味噌は優秀だよ。麹菌、酵母菌、乳酸菌どちらも入ってる。洋食材に和の基本を合わ

せると、おいしいし体にも最高！」

学んだ専門知識を、川松さんは日常の暮らしに即して教えてくれる。

「いまは物が溢れている時代。物をただ売

れるんじゃない、品物のプロセスやストーリーを語り、客と会話しながらやつていくのが個人商店だと思う。商店主はそれぞれが、商う品のプロなんだから」

商店街の生き残りもそこにかかるといふ。川松屋では、「今日は活きのいい魚が手に入つたから」「ホームパーティをするんだけど」などと遠慮なく相談てきて、一番おいしく、健康的に飲めるお酒をセレクトしてもらえる。私は最近、腸の働きが鈍つて以來、気がしたので、川松さんがプロデュースに参加なさつたという「甘酒」を買つた。「酒」

甘みはブドウ糖、旨みはビタミン類とアミノ酸から出ているという「飲む点滴」。確かにおいしい。そして腸の具合も良くなつた。

プロの話には耳を傾けるべし、である。▼



「よこしん」 親子でエコ教室

（よこしん）では、次代を担う子どもたちの健全な育成に貢献するため、地域の子どもたちを対象とした各種のイベントを開催している

横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを実践する「横浜ジェリービーンズ俱楽部」事業を展開しています。同俱楽部は、横浜の価値を高める各種の活動を行うことを主目的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業になっています。ここでは、最近実施された同事業についてご紹介します。

7月21日（火）横浜美術館において、教育環境イベント「（よこしん）親子でエコ教室」を開催しました。このイベントは小学生に「エコ」を楽しんで学ぶもので、横浜市から日立造船が協賛して、横浜市唯一の環境パフォーマーの認定を受けたエコ実験パフォーマンスショーや、環境省から日本で唯一の環境パフォーマーの認定を受けたエコ実験パフォーマーの講師による「エコ実験パフォーマンスショーや」を楽しんでいたきました。

手品やジャグリングなどを交えながら、らんま先生が環境問題についてわかりやすく解説しました。

第2部には第1部から10組22名が参加し、横浜美術館員による指導員による指導のもと、色画用紙やマジックを使って、個性あふれる環境ポスターを制作しました。



横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを実践する「横浜ジェリービーンズ俱楽部」事業を展開しています。同俱楽部は、横浜の価値を高める各種の活動を行うことを主目的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業になっています。ここでは、最近実施された同事業についてご紹介します。



「キッズ・マネースクール」

8月18日（火）当金庫本店にて小学4～6年生と保護者の方々を対象に、「（よこしん）親子でエコ」を開催しました。このイベントは小学生に「エコ」を楽しんで学ぶもので、横浜市から日立造船が協賛して、横浜市唯一の環境パフォーマーの認定を受けたエコ実験パフォーマーの講師による「エコ実験パフォーマンスショーや」を楽しんでいたきました。

このイベントは、横浜市から日立造船が協賛して、横浜市唯一の環境パフォーマーの認定を受けたエコ実験パフォーマーの講師による「エコ実験パフォーマンスショーや」を楽しんでいたきました。



横浜ルネサンス No.25 2015年11月11日発行

発行 横浜信用金庫
〒231-8464 横浜市中区尾上町2-16-1
Tel:045-680-6912
Fax:045-651-2303
<http://www.yokoshin.co.jp>

編集／制作 横浜信用金庫総合企画部
(横浜ジェリービーンズ俱楽部)
<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>
E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp

How To Taste Musics In Yokohama. 横浜の聴き方 第17回

「横浜銀蠅のインテリジェンス」

日本ではロックンロールという、「ジョニー・B・グッド」などのオールド・ロックンロールを思い浮かべることが多いようだ。音楽的にはシンプルな構造で、チャック・ベリーの時代に完成したジャンルである。革ジャンにリーベント（キャロル）というスタイルも定番で、ダウン・タウン・ブギウギ・バンドが白いツナギにサングラスで登場したときは、「この手があつたか」と思った。

ロックンロールは、その場にとどまつて再生産を続けるには音楽としての枠組みが狭いのだろう。そこからスター化したミュージシャンも大抵は音楽的な幅を広げていく。矢沢永吉はオーラド・ロックンロールからスタートし、最高にうまく昇華した例である。

ロックンロールは、突き詰めていくとコミカルになる傾向がある。チャック・ベリーのダック・ウォークは、今ではギャグである。ハンド・ドッグなどは、ひたすらシリアルにロックンロールしているのに、筆者にはコミカルに見えた。ロックンロールのコミック



性を意識的に拡張したのがザザンオールスターズだろう。チャック・ベリーのダック・ウォークがそうであるように、ロックンロールの本質は、そのスタイルというか様式（モード）も同様の傾向がある。1980年にデビューした横浜銀蠅は、ロックンロールの限界を逆手に取った知性的なバンドだつたスタイルは派手なりーゼントにサングラス、革ジャンに白のドカン、「ツッパリHigh School Rock'n Roll（登校編）」、ヒップフリーフリRock'n Rollなど、ジョーダンになっていることを承知で思い切りシリアルといふべきだ。その音楽性については、作曲家のいざみたくが絶賛していたデビュー時の正式なバンド名は「THE CRAZY RIDER 横浜銀蠅 ROLLING SPECIAL」。いいですね、こういうケレン味。ロックンロールの本質が様式性にあることを理解していく、かつ批評性がある

（中島久）

ハマジョは
《よこしん》



WE HAVE
THE BANKBOOK of
JELLY BEANS.



横浜のニックネーム、《Jelly Beans》をデザインしたジュリーピンズ通帳